北海道函館市深堀町。古い木造のアパートで、3歳になる娘と犬とアヒルに囲まれて暮らしていた若い夫婦に2番目の女の子が生まれたのは、1972年2月17日のことだった。

「希望が有りますように」

そんな願いをこめて「有希」と名づけた祖父は、その日、雪のマンホールに埋まった。

生まれたときは未熟児で、なかなか保育器を出られなかった。ミルクも飲まず、なかなか大きくならない娘を父母は心配したが、結局家族の中でひとりだけ、有希は小さいままに成長した。生まれたばかりのひよこが親だと信じて後をついて回るのを、怖がって逃げ回るほど小さいな娘だった。

ものごころついた頃から絵と歌が好きだった有希は、寝る前には母親にいつも歌をせがんだ。バスガイドをやっていた亮子は、娘が寝つくまで歌をうたってやった。だが、歌えば歌うほど、娘はまったく寝つこうとせず、「もう1回、もう1回」と同じ歌を何度も聞きたがった。やがて弟が生まれ、自分ひとりにかまってもらうなくなるまで、有希は母の声を自分のものにしたがった。

弟の民教が生まれるとまもなく、一家は海沿いの町に引っ越した。祖父が亡くなってひとりになった祖母と一緒に暮らすには、アパートは狭すぎたからである。

函館市湯浜町。国道に面した家の裏側には、美しい海岸線で知られる大森浜が広がっていた。遊泳禁止の札が立ってはいたが、夏になると水遊びをしに海に出た。ふだんは娘への接し方が今ひとつ苦手な猛も、このときとばかり子供たちに泳ぎを教えた。有希は潮風も水も、穴を掘ると出てくるミミズも大好きだった。

夜になると、家のベランダから岬の光が見えた。晴れた日には遠くにイカ釣り漁船の漁火も見える。

「今日はイカ釣り、多いな」

「うん」

浴衣姿でおいしそうにビールを飲む父の横でジュースを飲むのが、有希には何よりの楽しみになっていた。

「有希、有希!」

台所から母親の怒鳴り声が聞こえて、有希は見ていた本を閉じた。あわてて時計を見る。

(しまった。お米をとぐのを忘れていた)

急いで台所のドアを開けると、ぞうきんが顔めがけて飛んできた。

「何度言ったらわかるの! 母さんが帰ってくる前にお米だけは洗ったおいてって……」

最後まで聞くことなく有希は米をとぎはじめた。頭の中ではさっきまで見ていた本のページがまだ浮かんでいる。

「母さん、あのね……」

言いかけてやめた。今、そんなことを言うのはどう考えても逆効果だ。黙って米をとぐと、みそ汁の準備も始めた。

両親が共働きのため、磯谷家では子供たちがごはんのしたくをすることになっていた。茶碗を洗って、米をといで、みそ汁の下ごしらえまですませておく。あとは母が帰ってからおかずを作ることになっていた。それ自体は決して嫌いではなかったが、何かに夢中になると、つい時間を忘れてしまうのが有希の悪い癖だった。

食事が終わってから、有希はおそるおそる母に切り出した。

「欲しいものがあるんだけど……」

それは普通の白いブラウスとスカートだった。

小さい頃から、有希が着るものはいつも姉のお下がりが、母のお手製に決まっていた。共働きとはいえ、一家5人の家にそれほど余裕はなかったし、何より亮子は服を作るが得意だった。だが、小学校に上がった有希は、自分が着ているものが他の生徒と違うことに気がついた。

授業中、みんなはブレザーとスカートなのに、自分だけは母の縫ったコーデュロイのオーバーオール。体育の時間、みんなは白いトレパンに白いソックスなのに、自分だけは赤のジャージに横縞のニーソックス。

「いそやの、へーんなの」

そう同級生に言われると、いたたまれなく恥ずかしかった。

「みんなと一緒のが欲しい」

素直に口にすると、母は言った。

「なんでみんなと同じのがいいの?」

率直に聞かれて有希はとまどった。なぜかと言われても困ってしまう。一緒がいいからいいのだ。それ以外に答えられない。

黙ってしまった有希に母はたたみかけるように言った。

「みんなと同じなんてつまらないじゃない」

亮子にしてみれば、とっさのいいわけでもあり、本音でもあった。自分が作るもののほうがかわいい妙な自信もあった。だが、その言葉は有希の将来に大きく影響を与えることになる。

(みなんと同じじゃつまらない)

その言葉を頭の中で繰り返しながら、有希はたしかにそうかもしれないと思った。

翌日、有希は走って家を出た。他の子たちと違う恰好が、なぜか誇らしく思えた。

「おはよう」

「おはよう」

元気にあいさつを交わしながら、”自分は違う”という幼い自我が有希の中で芽生えはじめていた。